様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７００９９

研究課題名（和文）地方芸能文化形成と都市演劇文化摂取の実態研究

研究課題名（英文）Influential relation between Local entertainment culture and City dramatic culture

研究代表者
後藤　博子（GOTO, HIROKO）

帝塚山大学・文学部・准教授

研究者番号：８０６１０２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の参勤交代制のもとで江戸の文化は国元に運ばれ、地方文化に影響を与えていた。歌舞伎や人形浄瑠璃といった都市演劇文化も、地方から高い関心を集めていた。本研究では、第一に対馬藩において、江戸屋敷で上演されていた人形浄瑠璃を小姓たちが習得し、国元で小姓操りとして上演していた事例に注目した。これは藩主宗義真の意向によるもので、組織的に運営されていた実態も窺えた。第二に、鳥取藩士の日記から、江戸詰となった藩士が芝居を熱心に観覧していた実態も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：City dramatic culture such as kabuki and puppet ballad drama also was of the high interest from an area.The puppet ballad drama performed at the Tsushima feudal lord private mansion in Edo, and I paid attention to the case which was being performed by Kosyo at a native place.The clansman who came to Edo from Tottori frequently saw plays at Kabuki theatres.

研究分野：日本近世文学

キーワード：歌舞伎　人形浄瑠璃　対馬藩　鳥取藩　小姓操り

１．研究開始当初の背景

(1)近世江戸演劇文化の基礎的な研究として、江戸における人形浄瑠璃・歌舞伎の上演記録データベースの構築を進めてきた。その情報源として、対馬藩・鳥取藩・加賀藩・岡山藩などの藩政史料から、江戸藩邸における演劇上演記録を多数収集してきた。藩の記録について江戸と国元と両方を対象として調査を行ったところ、江戸屋敷で享受されていた都市演劇文化が国元に運ばれていた事例を見出した。岡山藩では江戸屋敷で愛顧を受けていた歌舞伎役者が国元に下向し、岡山藩の祭礼行事で芸能の指導に当たっている。さらに、対馬藩では、江戸で上演されていた人形浄瑠璃と同じ演目が、国元で小姓たちによって演じられていたことが知られる。地方文化形成に都市演劇が影響を与えていた事例と捉えられ、その実態について解明したいと考える。

(2)関係機関の調査を通して、藩士の私的な記録も見出せた。鳥取藩士の日記には江戸に滞在した期間に藩邸での芸能を観覧したことや、歌舞伎の芝居を見に出かけていたことなどが記される。個人の日記から都市演劇の愛好の様相を解明できれば、地方文化に与えた影響も具体的に見えてくると考える。

２．研究の目的

(1)対馬藩において、江戸屋敷で享受していた演劇文化が国元にどのように取り込まれたのか、その実態を明らかにする。対馬藩の国元の記録では元禄九年に先代藩主宗義真が帰国して以降、小姓に人形操りを上演させていることが確認できる。小姓操りが国元で行われるようになった背景には藩主の意向や、江戸屋敷お出入りの演者の関与があったと想定されるので、江戸と国元の藩政史料の調査を進め、小姓操りの成立事情について具体的に解明する。

(2)鳥取藩、岡山藩などの、公的な藩政史料の調査結果を基盤として、藩士や藩主などの個人の記録についての調査を進める。私的なレベルで藩士や藩主の一族が芝居町に出かけて歌舞伎や人形浄瑠璃を見ている事例についても注目し、その都市演劇文化享受の実態を明らかにする。

３．研究の方法

各地方に出向いての資料調査を基本とし、その情報整理と解析を実施する。資料調査については二つの柱を設ける。第一に通史的な上演記録の収集であり、第二が個別資料の精査である。特に藩政史料から抽出した芸能関係記事や、藩士個人の日記など、研究課題の解明に有効と判断した資料に着目し、それぞれの資料の性格に応じた調査を進め、情報を分析する。

４．研究成果

(1)対馬藩の小姓操り

対馬藩の小姓操りの事例については、小姓操りとして国元で上演された演目が、宗義真の江戸滞在期間中に、江戸屋敷で土佐座や半太夫座によって上演された演目と多くが一致することを確認した。宗義真が隠居して帰国するにあたり、国元へ人形浄瑠璃を持ち帰ることを企図したと推測される。小姓操りを担う小姓たちは江戸詰め経験者がほとんどで、おそらく江戸藩邸において、お出入りのプロの演者たちから、人形浄瑠璃の技術指導を受けたと考えられる。国元では小姓操りとして年に数度、宗義真の指示で上演され、藩主の家族や藩士たちが観覧していたことが知られる。国元の記録では、小姓操りに従事していた小姓の動向についても具体的に知ることができ、小姓組の中で藩士が藩士を指導する体系も形成されていたことが窺える。

(2)対馬藩における観劇

対馬藩の資料調査から、藩主の生母が湯治に出かけた際の記録が見出せた。宝永期に現藩主の生母で先代藩主の頃から側室として国元に住まいを続けてきた女性が、はじめて有馬に湯治に出かけた際の記録である。それによると、対馬から船で出発し、大坂に到着すると、数ヶ月間、対馬の大坂屋敷に滞在している。その際、大坂や京の芝居町に出かけ、万太夫座などの歌舞伎を見物していたことが知られる。湯治という名目で、大坂や京を見物することが主目的であり、特に歌舞伎の観覧は主要な目的であったと推測される。大坂、京でそれぞれ二週間程度の間に５，６回の歌舞伎観覧を行っていたことが確認できる。これまで、大名家の観劇に関しては、江戸屋敷における座敷芝居が主であると認識されてきた。しかし、藩の記録からは、藩主の家族、たとえば生母や娘、息子といった人物が江戸の芝居町に出かけていた動向がわずかであるが確認できている。対馬藩の藩主の生母の湯治に関わる記録は、大名家の者が旅に出て、京や大坂といった都市の演劇文化を享受することを積極的に行っていた事例として興味深い。

さらに、対馬藩の藩主の参勤交代に関する道中日記を調査した結果、藩主一行が国元から江戸へ、もしくは江戸から国元へ移動する際、途中、大坂屋敷に滞在し、そこで、大坂の芝居町で活躍する歌舞伎役者などを呼んで座敷芝居を上演させていたことが確認できる。寛文期には道中日記に隔年で上演記録が見られるので、大坂屋敷での恒例行事となっていたことが窺える。また、隠居した前藩主宗義真が湯治に出かけた際や、江戸の正室が箱根に湯治に出かけた際の記録からも、旅先で芸能を享受していた事例が見出せる。旅行先での娯楽の一つとして、観劇が主要な位置を占めていたことが窺われる。さらに、こうした大名家における都市演劇享受の事例は、大名家が藩の文化を牽引する主導的役割を果たす中で、地方文化形成に及ぼした影響

を考える上で、視野に入れる必要があると考える。

(3)鳥取藩士の観劇の事例
　鳥取藩士森藤十郎の日記から、江戸詰になった当初は先に江戸で暮らしていた藩士に連れられて歌舞伎を見に出かけていたことが知られる。江戸の生活に慣れてくると一人でも頻繁に出かけるようになり、歌舞伎を楽しんでいた様子が番付や看板の写しの記録などから窺える。知り合いの藩士が商人から接待として歌舞伎に招待されたときにも、森藤十郎は同行しており、歌舞伎の番付を詳細に記録している。約１年の江戸詰の期間に歌舞伎や人形浄瑠璃といった都市演劇を頻繁に享受したことは、都市演劇文化への関心を高め、国元に戻って以降もその関心を維持していたことも知られる。歌舞伎や人形浄瑠璃の地方巡業にはこうしたニーズにも応えられる要素があったと考えられ、地方巡業への都市演劇界の役者の出演経緯にも影響を与えたと推測される。

(4)岡山藩における演劇文化移入
　岡山藩では江戸屋敷お出入りの歌舞伎役者が、藩主が在国中には岡山へ下向し、藩主の前で歌舞伎を上演するだけではなく、祭礼行事の芸能の指導に当たっていた事例が知られる。この知見を踏まえ、岡山藩の国元の記録調査を進めた結果、国元で江戸の歌舞伎役者たちが中心になって歌舞伎を上演していた事例も確認できた。このような江戸屋敷を拠点とした大名家と歌舞伎役者の関係が、国元にまで波及した背景には、都市演劇文化を国元に積極的に移入したいという藩主の強い意向が存在していたと推測される。藩主池田綱政は特に歌舞伎を好んでいたことで知られるので、大名の個人的な資質による都市文化の地方への摂取と捉えることもできるが、対馬藩の事例などともあわせて分析し、他藩でも同様の影響関係が展開していた可能性について考証する必要があると考える。

(5)大和郡山藩の演劇文化摂取
　柳沢文庫の大和郡山藩の資料調査を通して、柳沢信鴻の日記「松平美濃守日誌」を見出した。信鴻が若殿であった頃から藩主となり、隠居するまで自身が記録していた日誌である。江戸屋敷で演劇を享受していたことも知られるが、特に注目されるのは藩主時代に国元に戻ったときの動向である。人形浄瑠璃を愛好し、自ら義太夫節を語ることに情熱を注ぎ、江戸から大和郡山藩に帰ると、すぐに三日にあげず義太夫節を稽古する日常になっていたことが知られる。上方の浄瑠璃に傾倒していたようで、大坂から浄瑠璃太夫を呼んで稽古していた。上方の芝居小屋で上演されている作品を次々と稽古している様子が窺える。上方の都市演劇文化を積極的に取り入れていたといえる。信鴻は自身の浄瑠璃の会も催しており、こうした藩主の嗜好が大和郡山藩の文化形成に与えた影響も見て取れる。

(6)大和郡山藩源九郎稲荷
　大和郡山藩の資料調査からは、源九郎稲荷神社の沿革について情報が得られた。享保九年に柳沢吉里が郡山に転封になった際、新領の寺社を調査した「和州河州寺社鑑」が柳沢文庫に伝存しており、その「洞泉寺」の項に、「鎮守」として「稲荷小社」の記載が見られる。つまり、源九郎稲荷神社は浄土宗の洞泉寺の境内の鎮守「稲荷小社」として建立され、後に源九郎稲荷神社として独立したと推測される。その背景には延享四年に大坂竹本座で上演された「義経千本桜」の成功と、本作に登場する「源九郎狐」の人気が影響を与えたと考えられる。都市演劇文化の影響が、ゆかりの地としての地方の神社の発展につながった事例として捉えられる。

(7)土佐少掾座の研究
　大名家文書調査を通して、演劇上演記事を収集し、上演データを蓄積したことにより、江戸の浄瑠璃作品の初演年次、背景についても考証の手がかりが得られた。
　元禄期の江戸を代表する土佐少掾の浄瑠璃においては、『平家物語』『太平記』『曽我物語』といった軍記の利用が見られる。特に、軍記に引用される「故事来歴」を原拠とした趣向が土佐少掾座で上演される浄瑠璃では重要な場面となっていた。
　本研究では、大名家の江戸屋敷での上演が確認できる「大職冠二代玉取」「土佐日記」で、主人公と恋人の出会いの場面、あるいは合戦での身代わりの場面という重要な場で、それぞれ『平家物語』『曽我物語』所載の故事が本文も襲用しながら趣向化されていることを明らかにした。「土佐日記」は上方浄瑠璃である加賀掾正本「伊勢物語」をもとに、江戸の土佐少掾が移入した改作であるが、上記の身代わりの趣向は土佐少掾座が独自に設定したものであり、先行作「伊勢物語」には見られない。土佐少掾座が江戸で改作を上演するにあたり、江戸の観客に喜ばれるよう配慮した結果と捉えられる。
　大名家の文書調査に基づく本研究の成果から、土佐少掾座にとって、大名家の江戸藩邸は重要な上演の場であり、武家はターゲットとして重要な位置を占めていた。軍記の故事来歴をもとにした趣向も、武家をターゲットとして意識していたことを背景に、創出されたものと位置づけられる。

(8)元禄期和泉太夫座の研究
　寛文期、武家を中心とする江戸における金平浄瑠璃の流行は、初代和泉太夫座が牽引していた。元禄期に至り、二代目和泉太夫の時期になると、作品傾向にも変化が認められる。
　本研究では、ニューヨーク公共図書館スペ

ンサーコレクション所蔵『三国名剣てつせん花』（二代目和泉太夫正本）の分析を通して、「たまくらの前」という女性を登場させ、金平たち荒々しい力自慢の男性との繊細な美女の対比という舞台効果を計算していたことを明らかにした。初代和泉太夫の上演作品には女性登場人物はほとんど存在しなかったが、二代目和泉太夫座では、元禄期の江戸の観客の要請に応えるため、女性を登場させ、恋愛の要素をからめる演出も行うようになる。上記の事例は、舞台上で大きく豪快な男人形と優美な女人形の対比を見せ、一方の浄瑠璃でも怒鳴りつける男性のセリフと恋慕の思いをかき口説く女性のセリフを語り分けて聞かせ、それぞれの魅力を強調する効果を意図した創作として注目される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①後藤博子、対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（元禄十年から十四年まで）、演劇研究会会報、査読無、42 号、2016 年、pp22-44

②後藤博子、対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（元禄九年）、演劇研究会会報、査読無、41 号、2015 年、pp31-42

③後藤博子、源九郎狐と大和郡山藩の稲荷、朱（伏見稲荷大社）、査読無（依頼原稿）、58 号、2015 年、pp208-225

④鈴木博子、対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（元禄元年から八年まで）、演劇研究会会報、査読無、40 号、2014 年、pp25-52

⑤鈴木博子、対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（寛永五年から貞享三年まで）、演劇研究会会報、査読無、39 号、2013 年、pp49-74

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）
①後藤博子、土佐少掾の浄瑠璃における軍記の利用方法―『故事来歴』の趣向化―、松尾葦江編、笠間書院、文化現象としての源平盛衰記、2015 年、pp502-512

②後藤博子、時代浄瑠璃の女性登場人物、故国文学研究資料館編、ぺりかん社、アメリカに渡った物語絵―絵巻・屏風絵・絵本、2013 年、pp206-216

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
後藤　博子（GOTO,Hiroko）
帝塚山大学・文学部・准教授
研究者番号：80610237

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）